

## シャーマニズム教授に関わる実践報告 —文化人類学の視点から—

安倍 宰

本報告の目的は、國學院大學その他の大学において、「文化人類学」の授業（講義）の中でシャーマニズムを学生に教授するその視角を考察する一つの素材を提供することにある。報告者はシャーマニズムが汎宗教的現象ないしは身体文化の重要な一側面であるとみなしているのだが、マスメディアや一部教団宗教などは単なる「際もの」「邪宗」と見なすことも多いのが現実であり、一般通念ともいえる。こうした現実に対して、アカデミックな立場からの言説はどの程度までその立場を確保できるのかを最終的な到達点と考え、その第一のステップとして、学生たちの偽らざる認識を通じて一般通念との理解回路を見出すことを目的とする。本報告はその一通過点と見なすこともできる。

報告者は、本学を始めとしていくつかの大学で「文化人類学」の講義を担当させてもらっている。その講義の中で、前期、後期のタームどちらかのテーマを“身体”として、身体文化に関わる授業を組み立てている。シャーマニズムはその中のトピックの一つとして講じられる。

まずは、ある年度における身体論の講義概要を記しておく。なお、國學院大學以外の大学は、それぞれA大学、B大学と表記する。

### 1. 平成24年度「文化人類学研究ⅡE」（A大学）におけるシラバス実践

#### 第1回 インTRODクシヨン

身体文化とは何か…「心身二元論」の限界を示すとともに、文化が異なるといかに身体動作が異なり、それによって世界観が違うものになってゆくのかを示す。骨密度の関係で、アフリカ系民族には「水泳」の文化が定着しない。ある民族ではおぼれた者を助けても死刑になることもあったというトピックを提示。

#### 第2回 身体技法の文化性

モースの“身体技法”…フランスの社会学者、マルセル・モース Marcel Mauss の概念である“身体技法”、その文化性を「彼ら」の実践形態を事例をあげて紹介する。「しゃがむ」「座る」「寝る」「食べる」など、私たちが意識することもなく行う行為がきわめて大きな文化バイアスの中で行われていることを示す。

### 第3回 市川浩の身体理論

『精神としての身体』…“身体”の現象学。①主体としての身体…私たちが「内側」から把握する、「広がり」としての身体。②客体としての身体…皮膚の外から把握される「塊」としての身体。③他者に現れた自己の身体…他の人の言動に表れた自己の身体。羞恥心、人見知りなどは、それらに対する嫌悪感として認識される。④他者の身体…他人の身体は別の“物質”ではなく、微笑みに思わず微笑むというように、シンクロする場合も多い。『〈身〉の構造』…心身二元論を超える試みで市川が注目したのが、やまとことばにある「身」という考え方である。「身代金（≒命）」「身構え（≒姿勢）」「身支度（≒髪、衣類、化粧）」というように、単なる肉体から「精神」という言葉に近いものまでの幅広いコノテーションで「身」が理解されることを示す。

### 第5回～第7回 シャーマニズム

(別項にまとめて示す)

### 第8回 法と文化主体

“ワークルスムヌ”と法令…沖縄県宮古地域のフィールド調査に基くもの。当該地域のいくつかの村落では、男性成員のほぼ全員が衛生的にブタをと殺する身体文化を共有している。慶事はもちろん、ある村落では葬儀に際してもワークルスムヌ（「ブタのと殺」を指す方言）を行うこともある。しかし、条例の適用が変化し、公衆衛生の観点から「密殺」の取り締まりが厳しく行われるようになった。この時、「取り締まられる」側の主体ロジックのあり方を考える。

### 第9回 盛り場と身体

都市社会と盛り場…都市人類学において、都市住民の主体的な生活実践のあり方として、和崎春日の“他者との拮抗的共存”の考え方を紹介。機能的空間配置の中での都市的生活様式のあり方から「盛り場」を捉える視点を作る。

### 第10回 プロクセミクス

プロクセミクス…エドワード・ホールのプロクセミクス（個体間距離）概念を紹介。渋谷の盛り場の展開…渋谷が盛り場として成立するまでに、どのような歴史的展開があったのか、一般に“若者の街”として知られる渋谷だがその歴史性はどのようなものか、世代や美意識によって人々が思う“渋谷”が異なっていることを示す。渋谷の地図を渡し、自分が足を向ける場所に頻度別にドットを落としてみて、そこから何がみえるか考えさせる。

### 第11回 新宿の盛り場的展開

盛り場的歴史性…甲州街道の第一の宿場町として成立した“内藤新宿”は、はじめからイメージ通りの街であったこと、大戦後の闇市を經過し、歌舞伎町建設に

至る編年的経過をたどる。60年代の人口移動と“団塊の世代”の青年化が相まって、市民秩序に抵抗する「新宿文化」が成立したことを考える。

#### 第12回 新宿のトランスジェンダー文化

トランスジェンダーとは…性とジェンダーの区分

世界のトランスジェンダー文化

新宿の盛り場的特質

#### 第13回 トランスジェンダーと法

「特例法」の意味…平成15年に改定された戸籍法の特例法の中身

GIDと法

## 2. シャーマニズム（講義次第）

本講義における“シャーマニズム”の講義は、3回に分けられる。大まかには、①本講義におけるシャーマニズムの規定といくつかの事例、②沖縄・宮古のシャーマン（ユタ）の事例と“タマスウカビ”、③「夢を語る」人々、となる。

### 第1回 シャーマニズム

- ① シャーマニズムとはどのような現象か…佐々木宏幹の「シャーマン・プリースト」の差異。大船渡における「オショウサン」と「オガミサン」の共存。
- ② 脱魂型と憑霊型…同じく佐々木説からシャーマンの二分法を紹介する。前者の代表例としてチュクチ族の“サマン”、後者は台湾や東南アジアでみられるタンキーやムードンを示す。
- ③ フィールド調査で出会ったシャーマン…報告者が行った沖縄・宮古におけるフィールド調査で話を聞くことのできたシャーマン（ユタ）の成巫過程を考える。初めて会った職業ユタであるAさんを事例としてあげる。

### 第2回 シャーマニズム（2）

- ① 事例紹介…前回のAさん以外にも、あと4人のユタを紹介する（Bさん～Eさん）。
- ② 「ユタ＝超能力者」図式の超克…某アニメーションにみられるように、シャーマンを「超能力者」的な視点で捉える言説が一般にみられる。その“胡散臭さ”を強調する意味もあるのだろうが、シャーマニズム理解にとっての妨げでしかない。
- ③ そのための二つの視点…その超克のために報告者が現時点で提示しうる二つの視点を紹介する。「タマスウカビ」と「夢語りの文化」である。
- ④ タマスウカビ…宮古の人々と話していると、時折、「タマシイが落ちた」「タマシイを落とす」という表現に出会う。そのとき彼らの言説の中には、時折ユタの影がちらつく。「タマスウカビ」とは、落ちたタマシイを元の身体に戻す儀礼的動作、意味付けをいう。
- ⑤ タマスウカビの事例…ここでは3人の事例を紹介し、職業ユタと「一般人」の身体図

式（キネステーズ）が基本的に同じであり、並べるなら一種のグラデーションのように「切れ目」がないことに着目させる。

- ⑥ マウガンという祭祀物…ユタに関連する話の中には、「個人の守り神」と説明されることの多いマウガンが登場することが多い。（この話は、場所によって話す機会がない場合もあった）

### 第3回 「夢を語る」人々

- ① 夢の意味…誰もがみる夢であるが、その生物学的な意味、文化による意味付けが本格的に行われることは少ない。
- ② メディアスの睡眠理論…ロンドン大学の動物行動学、レイ・メディアスの睡眠理論から、夢の意味を考察する。教授は、睡眠とは種にとってもっとも危険な時間（ヒトにとっては夜）に体を固定するメカニズムであると説く。その中で夢とは、一定の間隔で行う「偵察」のメカニズムであると意味付けられる。
- ③ 「夢を語る」人々…当該地域の人々と暮らしていると、思いのほか昼寝が多い。その多くが畳の上に直に寝たり、手枕での睡眠だったりする浅い眠りが多いため、夢を見る確率も大きくなる。さらに当地には、ユンタクと称する辻々での雑談の風習があり、ここで他の話題と変わらぬ比重で夢の話がなされる。夢の共有が行われ、その総体がムラのような意思のような様相を帯びることがある。一般の人はもとより、ツカサ（プリーステス）に選出された女性たちも後付け的に夢によって選出が予知されていたとの意味付けを行うことも多い。私たちの中でも、夢は頻繁にみるものであるし、インフルエンザ時の不思議な幻覚なども加えるならば、こうした無意識がむき出しになる機会は想像する以上に多いのである。記憶、想像力、身体図式など、さらにシャーマニズムを含む無意識領域に働きかける文化様式も重要な研究分野になるはずである。
- ④ 付論：白日夢について…手元にある事例が少ないため、まとまった展望が見いだせない。そのため、付論の形を取り、病院で死にかけている叔母の姿を社において、しかも社内では死を意味する場所で見ってしまった同島の女性の事例を紹介する。そのあと、彼女はユタと共にその白日夢を分析したという話で終了する。

### 3. 学生の取り組みと理解（アンケート結果をもとに）

ここで取り上げる「文化人類学」の講義は3つの大学でほぼ同じ内容でなされた。しかし、それぞれの大学で、カリキュラムの中における当講義の位置付けが同じではないため、その点から触れておきたい。

國學院大學は、旧制度で言うならば、夜間開講の時間帯であり、文学部史学科の専門課程の講義の一つとして開講されている。よって、時間もやや遅い時間に配当されており、3年生次以上の学生の講座である。

A大学は、千葉県外国語、海外文化を学ぶ学生の多い大学である。ここでの「文化人類学」は「一般教育」の一つである。学年配当は全学年であり、そうした事情も手伝って

か、ここで検討する中では最も受講人数が多い。

B大学は、山梨県の短期大学である。卒業した後、他大学へ編入する学生も多い。当授業は、2年次後期に配当されている。編入試験や就職活動に時期が重なることも多く、年度によって受講生の数、取り組みに大きな差が見受けられる。

アンケートはシャーマニズムの3回分の講義が終了した時点で回答してほしい項目を告げ、B大学以外は持ち帰って翌週に提出してもらう形で回収した。調査項目は、以下の通り。この項目を板書し、学生が書写している間に回答用紙を配布する。なお、回答用紙はその日（および翌週）の出席表の役割も果たす。中身を成績に反映することは絶対にないこと、さらにその二つ以外の目的に本アンケートを使用することはないことを明言する。

(アンケート)

1. これまでシャーマニズム（ないしシャーマン）ということばを耳にしたことがあったか。(→Yes, No)
2. (1. でYesの人) どのような形で認識していたか。
3. (2. でNoの人) 大船渡の事例をどのように受け止めたか。
4. 授業を通して考えたこと（これまでのイメージが変わったかも含め）
5. こうした宗教文化を持つ日本文化について（他人事ではないという意味で）
6. フリー記述

## § アンケート結果分析

母数は、國學院大學15人（2回目の出席数と同数）、A大学56人、B大学24人（3回目の出席数と同数）となる。この人数は、シャーマニズムをテーマに授業を行った最終日の出席人数である。初回、2回目、3回目の出席人数を参考までにあげておく。国学院大學、各々13人、15人、18人。A大学、各々67人、65人、74人。B大学、各々26人、25人、24人。B大学がわずかに減少傾向を見せているが、國學院大學はその反対の傾向がうかがえる。

「1. これまでシャーマニズム（ないしシャーマン）ということばを耳にしたことがあったか。(→Yes, No)」について。

國學院大學…Yes-15、No-0

A大学…Yes-43、No-13

B大学…Yes-21（「おぼろげに」「名前だけは」を含む）、No-3

「2. (1. でYesの人) どのような形で認識していたか。」

國學院大學…イタコのようなもの（2名）、アニメから（2名）、超能力者・オカルト（3名）

A大学…アニメ・ドラマから（13名）宗教学の授業で（6名）、超能力・オカルト（12名）、

異国的（4名）、イタコのようなもの2名）、学術的定義とほぼ一致（8名）  
B大学…アニメから（3名…カードゲームから1名を含む）、超能力・オカルト（4名、  
他パテン師1名）、歴史的、異国的（3名）、プリーストと混同（3名）

2001年にある大学で身体論特別講義の一環でリレー授業を行ったことがあったが、そのときはフロアから「初めて聞いた言葉である」「イタコ以外にもそのような人がいるのか」などの発言があった。そのことと比較し、格段の認知度上昇が感じられる。回答中の「異国的」「歴史的」とは“自分とは関係ないもの”というニュアンスが強いように思われる。

「3.（2. でNoの人）大船渡の事例をどのように受け止めたか。」

数人（A大学…3人、B大学…1人）が欠席していて大船渡の事例を聞いていないとの回答があった。それ以外は「不思議なこと」「信じられないこと」「葬儀に様々な地域性があると認識」などの回答が目立つ。

「4. 授業を通して考えたこと（これまでのイメージが変わったかも含め）」

國學院大學…「超能力者という認識は枠を狭めてしまうと考えた」「(シャーマンは) 遠いものだと思ったが、意外に身近な存在だと考えた」「テレビは演出ということもあるが、胡散臭いものという印象が強くなる」「成巫の過程に興味を持った」（同意見がそれぞれ数件みられた）

A大学…「霊的なもの、祖先崇拜のようなものが日本には定着しているのだと思った」「マンガでしか知らなかったことが本当であって驚いた」「靈感の強い人がいても、それを信じる人がいなければ社会現象にはならないということがわかった」「夢に対して変な気分になった」「シャーマンに関して一種の恐怖心・差別心があったが、そのような感じがなくなった」「〈タマスウカビ〉は『我にかえる』というニュアンスに近いものでは」「シャーマニズムは日本にも古くからある文化だということがわかった」「シャーマン=かっこいいとか考えていたが、そのようなものではないと思った」（専門的すぎて理解できなかったという意見、実感の持てないまま終了したという意見もそれぞれ1件）（意外に身近な存在という意見も6件）

B大学…「不思議だと思った」「いろいろな人たちがいるんだと思った」「考えていたイメージと結構違うんだと思った」「周囲にそのような人がいないため、不思議だし少し怖いと思う」「自分の“普通”が普通ではないと考えた」「オウム真理教と同じようなイメージ」「全員がユタ族<sup>(ママ)</sup>になったら少しいやです」「夢もそれだけ昼寝をしたらあたる夢もあると思う」「記憶力、想像力について考えることができたが、超能力を持った人間がいるかというとな納得できない部分がある」「超能力的なものではないことがわかった」「不便というか苦勞することも多いだろうなと思った」「自分はオカルト的な見方から離れられないと思った」「現実味を感じない」「一般人との線引きも曖昧なものだということが理解でき

た」「日本にもいることに驚いた」

「5. こうした宗教文化を持つ日本文化について（他人事ではないという意味で）」

國學院大學…「予言者的に活動するユタに共感することはできなかった（同意見他1件）」

「日本人の精神に組み込まれている現象なのだということがわかった」「民族のアイデンティティを失わないためにも守っていききたい（同意見他1件）」「神道の原型がわかるのではないかと思った」「日本の文化を考えると（シャーマニズムは）普通のことではないかと思った（同意見他1件）」「自分も似た経験があり、特別なことではないと思った」

A大学…「日本はそこまで宗教の色が強くないが、色んな宗教文化を取り入れている（初詣、クリスマスetc.）シャーマニズムも取り入れる必要がある」「知らないうちに宗教文化の中で生活しているんだなあとと思った（同様な意見他4件）」「神の言葉が人間の行動基準になっている時代は終わったと思っていたのでそれが現代まで続いていることに驚いた」「日本にもこんな面白い文化があるなんて知らなかった」「宗教系のことに怖いイメージがあったが、そうではなくて身近で、神秘的なものだとわかった（同意見他2件）」「何となく刷り込まれてきた『日本は無宗教』的な考え方も地方の実感を無視して出来上がったものなのかなと感じた（同意見他3件）」「日本の宗教には昔からシャーマニズムの要素があったのではないかと思った」「もっと知ってみたい（同意見他2件）」「『私のお墓の前で…』という歌がありますが、シャーマニズムを覆すとしてもない歌詞だと思います」「日常生活の中にたくさんの宗教的価値が潜んでいるんだなと思います（同意見他4件）」「こうした文化は残していくべき（同意見他2件）」「日本にも日本人が知らない文化はたくさんあるのだなと思った（同意見他4件）」「夢の考え方が特に印象に残った」「日本にもシャーマニズムがあるのかと驚いた」「こうした文化があるのは当たり前だと思う」「宗教に関して寛容であるべき」「自分に関係のあるものだと感じなかった（同意見他2件）」「日本で最も興味を持つ文化です」

B大学…「このような宗教には警戒してしまう」「宮古島には縁がないが、これも日本文化だと思うと不思議なもののように思える」「日本文化の根幹に宗教的なものがあると思う」「意識していなくてもシャーマニズムが生活に浸透しているのだなと感じた」「同じ日本文化として考えることはできなかった」「いろいろあるということです」「写真では日本の中である東京の写真もあったので、日本はこれからどうなるんだろうという恐怖心が出てきた」「自分は日本のこと何も知らないんだなと思った」「特別視してはいけないんだと感じた」「日本文化の中に宗教文化があることが信じられない」

#### 4. 概観

アンケートを雑駁な形ながら整理してみた。学生の性別や所属などを単位にした分析が行われるのが理想であったが、資料数の問題で割愛することになった。

授業前は「宗教」に“胡散臭いもの”“危険なもの”というイメージの強い学生がほと

んどであるようだが、思ったより多くの学生が「文化としての宗教」を理解するところまで進めることができているようだ。信仰をキリスト教や多くの教団宗教と同一視し、意識的な信仰のみを「信仰」と考える学生が最後までいることに指導力の欠如を感じる。

この数年、授業でシャーマニズムを扱う際には、極力、シャーマンを「突然変異」「超能力者」のイメージから切り離すことを念頭において現場に臨んできた。それが部分的に成功したクラスもあるが、とりわけB大学では、そうした認識まで導くことができたと断言できない状況にある。シャーマニズムを他人事として捉えないようにという配慮を常にしたつもりであるが、最後までマスメディアのまき散らす際もの的なイメージに固執して、突き放してしまう学生が多いのが気がかりである。

全体にわたりアンケート用紙に目を通して見て、國學院大學では他にも宗教学的な授業も多いことから、初めからしっかりしたシャーマニズム認識を持っている学生が多いようだ。またA大学では、海外文化に接する機会が多いせい、そうした異質なものを頭ごなしに拒絶しない態度が涵養されているのかもしれない。同じ内容でも、学生が受講する他の授業との関わりによって内容理解に大きな差が出ることは改めて強く認識されるべきであろう。

夢に関する理論は、“身体論”をテーマにした当初から計画にあったものである。反応が形になって現れたのはA大学だけだったが、國學院大學でも個人的なディスカッションの中で何人かの学生に指摘されていることは付け加えておきたい。

平成生まれの学生が圧倒的多数を占める現在、アカデミックな好奇心を喚起してゆく授業を行う必要と困難は日に日に増しているように思える。ここで行ったアンケート分析の精度を高め、それを基にその世界観に触れる授業を数多く組み立てていきたい。